

食卓が

勉強机



吉村 幸代

「願はくは花の下にて春死
なむその如月の望月の頃」と
詠んだのは西行法師。

ことのほか雪の少ない冬が
過ぎ、新しい季節が訪れた。
誰もが待ちわびていた、生命
萌える春。例年より心なし早
めに桜花が満開となった日、
父が逝った。

深夜の病院には、あちこち
の病室から軽微なアラーム音

がひっきりなしに鳴り響いて
いる。わが父の枕元のモニタ
ーだけが押し黙ったまま、音
を発しない。

白衣の人たちが深々と頭を
下げて去った後も、私は病室
の窓から外を眺めていた。東
の山が薄明を帯びてきた。夜
と朝の間の薄い闇に、ほんや
りと浮かび上
がる白い影。
桜、桜、桜……
……ここまで

桜。淡い肌色に霞んだ城下
町。生きている限り私は、こ
の花が咲く度に、今日の日を
思い出すことになるのだから
う。

父が初めて入院した頃には、
残り柿の赤色が晩秋の青
空に映えていた。ひと冬を経
た今では、おびただしい数の

鳥がついばんでいた柿もすつ
かり千からびて、枝先にしが
みつく小さな黒点だ。種は、
生と死を繰り返して存続して
いる。

前日も私は夜遅くまで病室
にいた。父の鼻に差し込まれ
た酸素吸入器はポコポコと音
を立て、心電図の波形は次々

桜の記憶

と生まれ変わるように上書き
を繰り返す。口をあけたまま
眠り続ける父は、喘ぎながら
瘦せた身体に息を吸い込む。

その度に喉仏が上下するさま
を、私はじっと見ていた。昨
夜、父は確かに生きていた。

「医師の告げる存命期間
は、不思議なほどの中ずるも

のだ」と、人の死に関わった
者たちは口を揃える。悲しい
ことに私も、それを実感する
立場となった。

昨秋、父が余命半年と宣告
された時、自分が公民館長職
にあることを私は初めて悔や
んだ。看病に携わる時間が存
分に取れない。「年度末で館

長をおりよう
と思う」と切
り出すと、即
座に父は遮つ
た。「続けていてくれ、何が
あろうとな」。

父は入院十日前に観た寿台
文化祭の感動を語り、「太鼓
連を育て上げるまで辞めては
いけない」と強い口調で言っ
た。私は深く頷き、地区高齢

者クラブの正副会長氏がかけ
てくれた言葉を胸の内

反芻した。「館長、
覚悟を決めるんだ。」
近く分には仕方がな
その一言が私を支え
る。

人間らしく生き抜
をもち続けて死ぬこ
い。そして、その人
していたことを、最
で尊重し続けて看取
更に難しい。

思い出の場所に別
ながら、安曇野の自
帰りが着くと、小雨が
た。しとしとと降る
は、一晩であつた
らせた。桜は散り際
よさが好まれる、と
誰かがそっと呟くの
た。

(寿台公民館長、主
市)